



TITLE:

<5>大学院生のための教育実践講座 :大学でどう教えるか

AUTHOR(S):

CITATION:

<5>大学院生のための教育実践講座: 大学でどう教えるか. 京都大学高等教育叢書 2006, 23: 139-168

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54042>

RIGHT:

V. 大学院生のための教育実践講座
ー大学でどう教えるかー

V. 大学院生のための教育実践講座 —大学でどう教えるか—

1. はじめに

「大学院生のための教育実践講座」は、GP プロジェクト「相互研修型 FD の組織化による教育改善」の一環として、高等教育研究開発推進センター第 1 部門が、学生部教務掛の協力の下、平成 17 年 8 月 4 日、時計台記念館において実施した。大学教員をめざす京都大学の大学院生のために、教員への自覚的自己形成にきっかけを与えることを意図して、計画されたプロジェクトである。我が国の他大学で TA 研修が実施された例はあるが、このような院生研修は、全国で初めての試みであり、京都大学が、教育面で社会的応答責任を果たそうとする試みの一環である。

以下の資料に示されるように、総長の挨拶から始まり、ミニ講座、討論、ボディー・ワークなど 8 つのセッションで、長丁場の密度濃い研修が実施された。他大学からの参観者たちも見守るなか、全学の大学院生と臨時の参加者たちおよそ 40 名が、終始積極的に参加した。修了式で 36 名の院生に対して総長名の修了証が授与された。この講座についての事後アンケートや院生を交えた検討会での評価は、きわめて高い。本講座は、若干の修正を加えて、来年度も実施する。

1-1

「大学院生のための教育実践講座」を企画した理由は、二つある。

第一に、京都大学は、伝統的で大規模な研究大学院大学であり、その大学院生、わけでも博士後期課程在学生の多くは、高等教育の教育職に従事することになる。しかし、現状では、彼らに対して教育実践のための準備教育は、何一つとしてなされていない。この現状を改善することは、京都大学がその社会的責任を果たすことでもある。

第二に、京都大学の FD は、これまでほぼ毎年実施されてきた全学の教員を中心とする「全学教育シンポジウム」を唯一の例外として、全学規模の企画は存在していない。各研究科などで折々にトップダウンで企画される教育調査、教育評価、講演、公開授業などのプロジェクト、私たちのセンターが企画した公開実験授業、公開研究会、大学教育研究フォーラムなどのプロジェクトなどがあるにすぎない。院生を対象にしたこの FD プロジェクトは、京都大学の全学的 FD をそのもっとも基盤的な部分において実施するものである。

まとめていえば、院生研修は、京都大学における基盤的な FD プロジェクトであるとともに、京都大学がその社会的責任に応える営為でもある。そのために、この企画は、総長以下の熱心な公的支援を全面的に受けることができたものといえよう。

1-2

院生のための教育研修は、私たちの知る限りでは、合衆国の一部の大学にわずかに先行事例

があるだけである。ただし、合衆国と私たちでは、互いの大学や院生のおかれる文脈に大きな差異があるので、両者を同じように論ずることはできない。

ひるがえって我が国をみると、たしかに、今日に至るまで、この種の企画は、まったく実施されてこなかった。なぜそうなのか。これについて考えることは、おそらくは、我が国の大学教育のありようについて、根底的に考えることにもなるはずである。なぜ、大学院生に対する教育研修が考えられもしなかったのか。その原因としては、たとえば、大学教員の集团的自己認識—たとえば、自分を研究者と見るのか、それとも教育者と見るのかといった自己認識—が関連しているとも考えられようし、大学の教育にかけられる社会的期待のありようが関連しているとも考えられよう。

ともあれ、このいわば「無関心」の長い歴史を経て、実は、この京都大学の企画とほぼ同時期に、名古屋大学の高等教育研究センターもまた、大学院生のための教育研修を企画し、実施した(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/service/backup.html>)。この時期の符合には、ただただ驚くばかりである。たしかに、京大と名大のそれぞれのプロジェクトは、企画内容も実施形態も、互いに大きく異なっている。しかしこの企画実施が期せずして同時になされたことには、おそらく重要な意義がある。たとえば、これは、このような企画が念頭にさえ浮かばないような状況をもたらしてきた諸条件—たとえば先の大学教員の自己認識や大学教育への社会的期待など—が大きくしかも急速に変容しつつあることと、けっして無縁ではあるまい。このことについては、別の機会に、集中的に考えることにしよう。

1-3

我が国の大学院生たちは、これまで、教育者になるための訓練からはほとんど無縁なままに放置されてきた。そして、駆け出しの研究者としての徒弟修行をそこそこ終えた段階で、ある日突然、教壇に立たされることになった。正確に言えば、徒弟修行の階梯を昇るにつれてじょじょに後輩集団に対する若干の教育責任を担わされてくるから、院生たちが教育訓練から完全に放置されているわけではない。しかしこのようないわば「機能的な」養成メカニズムを別にすれば、かれらは、意図的な研修からはまったく疎外されてきた。そのために、かれらが意図的かつ自覚的に用いることのできる教育のやり方は、かれらが無意図的に体験を通じて獲得してきた雑多な知識技術だけに限られる。つまりかれらは、自分たちが「教えられてきたように教える」ほかはなかったのである。

本講座の企画は、このような「放置のメカニズム」を超えて、院生の教育力の養成をめざそうとすることにある。教育者としての養成は、本来なら、研究者としての養成とある程度は拮抗しうるような時間とコストをかけてなされるべきであるかもしれない。しかし、残念ながら、このような体系的な養成を試みる準備態勢は、まだどこにも存在していない。そこで本講座では、院生たちが自分たち自身を教育者として自己形成していく努力に対して基盤と方向付けを与えることを企図した。しかも、本研修は、「相互研修型FDの組織化」をめざすプロジェクトの枠内にある。したがってこの「研修」もまた、伝達講習ではなく、自己研修、相互研修としてなされなければならない。このことが、本研修の具体的なありようを定めた。

本講座では、ミニ講義とディスカッションとを一つのユニットとする基本的構成をとった。

一方通行の講義を受講生たちの集団的な自省とつなぐことを意図したのである。さらに、教育者としての自己形成を、たんに頭のレベルで行うだけではなく、知的・意志的な形成を支えるべき身体性のレベルでも行うようになることをめざした。そのために、ボディー・ワークを、セッションの中核に位置づけた。

このような研修の意図や構成は、院生の事後評価や彼らとスタッフとの反省会での議論などを見る限り、それなりに肯定的に受け容れられた。そして、この「大学院生のための教育実践講座」の好評を受けて、同様のセッションが「8 大学工学系博士課程学生フォーラム」（福井謙一記念研究センター）での「博士課程学生のための教育実践講座」の開講という形で引き継がれ展開された。

以上のように、今年度の先行的試行においても、たしかに予想以上に成果があった。しかし、反省の余地もなお多くある。たとえば、参加者の少なさ、研修後のフォローシステムの欠如、さらにいえばこの研修を含む全体的な研修の見通しのなさ、この見通しのなさ由来するこの研修の意味の不確かさ、効果測定の不十分さ、などである。試行の具体的なありようについては、以下に可能な限りの関連資料を掲載している。これらの資料に基づいて、本年度の試行についてできるだけの評価を行い、次の試行へとつなぐ努力を行いたいと考えている。

2. 実施概要

実施時期：2005 年 8 月 4 日（木） 10:00～18:30

実施会場：京都大学百周年時計台記念館 2F

（3 分割された国際交流ホールの 2 部屋と、小・中会議室を 3 部屋使用した）

参加費用：2,000 円（ランチ・終了パーティ代を含む。当日、受付で徴収）

参加対象者：

今回実施された講座への最終的な参加者は 36 名（男性 22 名、女性 14 名）であった。なお、事前申込の段階では 40 名（男性 22 名、女性 18 名）であった。詳細は表 1 の通りである。

表 1 参加者の内訳

理系（15 名）			文系（21 名）		
研究科	人数	課程	研究科	人数	課程
工学	6 名	修 2 / 博 4	教育学	11 名	修 5 / 博 5 / PD1
理学	4 名	博 4	文学	5 名	博 5
生命科学	2 名	修 1 / 博 1	経済学	4 名	修 1 / 博 3
医学	1 名	博 1	法学	1 名	修 1
薬学	1 名	博 1			
自然科学(神大)	1 名	博 1			

実施プログラム：(当日の配付資料を抜粋)

- 9 時 40 分～ 受付
- 10 時 00 分～ 開会式
- 挨拶 京都大学総長 尾池和夫
- 趣旨とプログラムの説明 高等教育研究開発推進センター教授 大塚雄作
- 10 時 20 分～ 移動
- 10 時 30 分～ セッション1 グループ討論1: (自己紹介)「大学の授業について」
- 11 時 30 分～ セッション2 ミニ講義1:「大学の授業1」
- 高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代
- 12 時 00 分～ セッション3 ランチと自由討論
- 13 時 00 分～ セッション4 グループ討論2:「大学の授業で教師に求められるもの」
- 14 時 00 分～ セッション5 ボディー・ワーク:「他者とのつながり・自分とのつながり」
- 京都文教大学教授 濱野清志
- 15 時 50 分～ 移動
- 16 時 00 分～ セッション6 ミニ講義2:「大学の授業2」
- 高等教育研究開発推進センター助教授 溝上慎一
- 16 時 30 分～ セッション7 全体討論:「大学で教えるために」
- 17 時 30 分～ セッション8 ミニ講義3:「大学で教えるために」
- 高等教育研究開発推進センター教授 田中每実
- 17 時 50 分～ 閉会式
- 挨拶・修了証授与 京都大学理事 東山鉦久
- 閉会式終了後 パーティ(18 時 30 分まで)

* なお、主にセンターから、講義、ファシリテーター、実施補助などのために、8人程度のスタッフが参加します。

グループ構成：

今回の講座では、参加された院生同士のディスカッションの場を2度設けている。そこで当センターの側で協議を重ねた結果、まずは理系と文系を分け、なおかつ文系を教育学を専攻するものを中心としたグループとそれ以外のグループの2つに分け、計3つのグループを構成した。特に、理系と文系を分けることに関しては、それぞれの教育・研究に対する文化的背景が相当異なるであろうことが考えられるため分けることとした。各グループの構成人数は、理系の院生によって構成されたグループ1が15名、教育学を専門とする院生を中心とするグループ2が11名、それ以外の文系院生によって構成されたグループ3が10名であった。なお、それぞれのグループには、リーダーとなる院生を置くとともに、センターの教員が1名ずつファシリテーターとして入り、議論の進行をコーディネートした。

3. 事前アンケートの結果

今回の講座を実施するにあたり、あらかじめ参加希望者には事前アンケートを郵送し、回答をお願いしている。これは、参加を希望する学生がどのような経緯で当講座を知り、どのような動機や期待を抱いているのかといった点を把握すること、グループに分かれてディスカッションを行う際のグループ分けの判断材料とすることを目的として行った。なお、この事前アンケートの有効回答数は40名中23名（男性14名、女性9名／修士6名、博士16名、PD1名）であった。

3-1. 本講座を知ったきっかけ

ここでは、どのようにして本講座を知ったのかということについて調べるために、「この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるものの番号をすべて○で囲んで下さい）」という質問を行い、表2にある7項目を選択肢として設けた。

表2 講座を知ったきっかけ

項目	人数(名)	割合(%)
①指導教官から	10	29.4
②その他の教員から	5	14.7
③友人から	4	11.8
④大学のHPで	4	11.8
⑤センターのHPで	2	5.8
⑥掲示板で	5	14.7
⑦その他	4	11.8

項目①と項目②はいずれも教員から知らされたものであり、両方を足すとおよそ5割近くにものぼる。また、項目⑦の「その他」には、「研究室の回覧板」「所属事務からのメール」「学内のメール」などがあげられていた。

3-2. 本講座の受講動機

ここでは、本講座を受講しようと思った動機について、「どうして、この講座を受講しようと思いましたか？」という質問のもと、自由記述で回答を求めた。その結果は、表3の通りである。

表3 講座の受講動機に関する自由記述（参加希望者40名中23名が回答）

・もともと大学での研究・教育に携わっていきたくており、将来、教育する際の何かの参考になればと思い、参加することにした。（薬学・博・男性）

・以前から、研究室の教育体制について不満があった。それは、指導教官が悪いということではなく、教官・スタッフを含め、学生自身も、教育についてのきちんとしたトレーニングを受けたことがなく、伝統的にトップダウンの指導のレベルが低く、悪循環が続いているためだと思う。それが京大の自由な学風を作っていると考える人もいるかもしれないが、研究室生活に必要な最低限の情報は伝えるべき、伝えられるべきであり、そのためには自分も最低限のコミュニケーション力を身につけ、高めていくべきだと思った。(理学・博・女性)

・「大学でどう教えるか」がどう語られるのかに関心を持ったから。

・センターの教員の方々が一堂に会していたから。

・小・中・高で教えるのとどちらがう(ように語られる)のだらうと疑問を持ったから。(教育学・修・女性)

・今年で博士課程を修了する予定で、来年以降非常勤などで学生と接する可能性もあり、自分に必要だと思ったので。(これからは大学教員も、教育者としての意識をより高めることが必要だと思うので、この講座に参加する必要があると感じた)(文学・博・女性)

・大学、大学院での教育に興味を持っており、実戦に向けての具体的なきっかけの場が欲しかったから。(理学・博・男性)

・大学教員を志望しているが、大学院では専門分野の研究が中心で、これまで大学教育にかんする知識を学ぶ場が特に設けられていないと思っていた。この講座を知り、大学での教育のありかたを直接学ぶよい機会になると思ったから。(文学・博・女性)

・大学における教育というテーマに興味があったから。(法学・修・男性)

・今年で課程を終える予定なので、今後の教授職への就職の可能性を考えたときに、この講座を受講することは有益なのではないかと考えました。(文学・博・男性)

・将来、研究職に就きたいと考えており、教育する or 大学で講義をすることも関係しますので、本講座に興味をもちました。(理学・博・男性)

・博士後期課程に入り、「教わる」とこと「教える」とこととの違いを痛感しております。近い将来において、自分が「教える」立場になることを求めています。はたしてどのように教えることが望ましいのか、教えることとはそもそも何だろうか、という根本的ないし方法論的な課題に対する何かしらの応えや接近法またはきっかけが得られれば、と思い応募いたしました。(経済学・博・男性)

1. 非常勤でいくつかの講義を担当させていただいているのですが、さらに良い授業ができるように、さまざまなことを学んでみたいと思いました。 2. 他の院生が「大学で教える」ということにどのような意識をもっておられるのか知りたいと思いました。(教育学・PD・男性)

・このような講座に参加する大学院生の、将来の研究活動や教育活動に対する意識のレベルがどの程度のものか興味があったから。(文学・修・女性)

・講座内容に興味があったため。(経済学・博・女性)

・将来、教職に就きたいという希望はあるのですが、自分が大学で教えることができるのかという不安があります。自分の進路を決める上で、何か役立つだろうと思い、受講を希望しました。(工学・博・女性)

・プログラム内容に興味を持ちました。非常に重要なテーマであるものの、普段大人数ではなかなか討論する機会のないこのテーマについて、じっくりと考えることができると思い、この講座の受講を希望しました。(経済学・博・女性)

- ・優れた研究者かつ優れた教育者である大学教員を目指しているから。これまでの大学教員は教え方について学んでこなかった(そのようなプログラムもなかった)ように思うが、今後はそれでは通用しないと思うから。(教育学・博・男性)
- ・大学でどう教えるか、ということについて他に学べるところがなかなかないから。非常勤など、いつ大学で教えることになるか分からない状態である今、できる限りの備えはしておきたいから。教育方法について、大学教育段階でも考えてみたいから。(教育学・博・男性)
- ・内容に興味を持ったため(特に、大学で教えるというのがどういうものなのかについて)(教育学・修・男性)
- ・「教える」能力は必要不可欠な能力であるが、それを身につけるための訓練を受ける機会はあまりなく、そのような機会である本講座は魅力的であったから。(文学・博・男性)
- ・大学での授業設計に関心があったため。自分が大学教員になるときだけでなく、現在の研究を進めるうえでも高等教育の現状や教育実践について学ぶ必要があるのではないかと思ったため。(教育学・博・女性)
- ・現在、他大学でTAの仕事をしていて、学部生を教える機会があるので、この講座で勉強したいと思いました。(経済学・修・男性)
- ・指導教官の勧めと、将来役立ちそうな内容であると感じたから。研究に直結すること以外の能力向上のよい機会となると考えたので。(工学・博・男性)
- ・大学でどう教えるかについての講義はなく、また、書物も皆無です。このようなテーマで実践講座が催されるということで、興味を持ち、受講を希望しました。(工学・修・男性)

全体的な傾向として、研究科の違いに関わらず、(1) TA や非常勤も含む何らかの形で自分たちがこれから大学教員として教育を施す場面に遭遇するということ、(2) そしてそれは研究とは違った知識やスキルが必要であるということ、(3) また、そういうこと(主として Teaching の側面)について学ぶ機会がほとんどないということ、などがあげられていた。

そういう現状認識を踏まえて、本講座を受講することを希望したことが伺える。

3-3. 本講座への期待

ここでは、本講座に対してどのような期待を有しているのかについて、「この講座にどんなことを期待していますか？」という質問のもと、自由記述で回答を求めた。その結果は表4の通りである。

表4 講座への期待に関する自由記述(参加希望者40名中23名が回答)

- ・現在、指導に携わっている教員(教授など)と現在は教えられているが、これから教える立場になる大学院生との活発な意見交換・討論を期待しています。(薬学・博・男性)
- ・他研究室や他学科の教育体制について実情を知ること。
- ・自分や周りの人がよりよい研究生活を送れるためのノウハウがあるならば、それを知ること。
- ・自分と同じ悩みやこころざしを持つ、同分野、他分野の友人を得ること。(理学・博・女性)

-
- ・充実した講義をしていただくこととても楽しみにしています。
- ・討論に参加させていただくこと。(教育学・修・女性)
-
- ・勉強する意欲がない学生に対して、ただ一方的に課題を強制したりするというような形ではなく、うまく学問することの喜びを伝える方法を学びたい。大学卒業後でもいいので大学で学んだことの意義を感じてもらうためにどうしたらいいか考える契機となれば、と思う。(文学・博・女性)
-
- ・まずそもそも大学教育に(高等教育に)たずさわる人がどのようなスタンスであるのか、また、教育に興味をもつ人がどのようなスタンスであるのか、自分との共通点、差を知りたい。また、教育に興味をもつ“仲間”をつくりたい。(理学・博・男性)
-
- ・大学のあり方をめぐっては様々な議論があると思うが、教員と学生との関係の点から大学はどうあるべきか考えるヒントを得たいと思う。具体的には、教員は、講義・演習・フィールドワークなどを通じてどのような指導が求められているのか、など。(文学・博・女性)
-
- ・実際の教育現場に立ったときに、様々な場面に応用ができる基礎的知識と現在の学校教育の状況についての情報。(法学・修・男性)
-
- ・大学教育は、どのように進められるべきであるのか、という点について考えを深められればと思っています。よろしくお願いします。(文学・博・男性)
-
- ・「大学でどう教えるか」、「大学での授業」についての講義を受けたことがなく、普段はあまり聞けない、それらについての専門的な話を聞きたいです。また、他の参加者と意見を交わせればと思います。(理学・博・男性)
-
- ・教えることの意義や教え方について、多面的な意見を耳にし、また同じ希望(大学等での教鞭)を持った他の参加者とのディスカッションにより、仮想的ながらも教育に関する自らの理解度が少しでも高まることを期待しています。(経済学・博・男性)
-
- ・大学の授業についての基本をあらためて学ぶことができたらうれしく思います。よろしくお願い申し上げます。(教育学・PD・男性)
-
- ・日本の大学では、アメリカの大学と異なり、「教育法」に関する院生向けのプログラムが乏しい点が問題であると常々思ってきました。また、そのことに関し、全く問題意識を抱いていない大学院生が多いことも大きな問題であると感じています。そのような、日本の大学院生の意識を変えて下さることを希望します。(文学・修・女性)
-
- ・人に何かを適切に伝える術を、学習できると期待しています。また、ドクターになると人との交流が偏るため、その点でも期待しています。(経済学・博・女性)
-
- ・大学で教えることが、自分にも可能かどうか判断できればいいと思います。(工学・博・女性)
-
- ・多くの方々と意見交換を活発にすることができることを期待しております。(経済学・博・女性)
-
- ・高校に教育実習に行った時に教わったような、授業(講義)の仕方(黒板に書きながら話さない、黒板の使い方、黒板と自分の身体の位置など)について教えるプログラムがあったらいいなと思うが、今回は実際に今後どうしていくべきかのディスカッションでもいいかもしれない。エピソードで具体的に役立つスキル・知識を教えてほしい。(教育学・博・男性)
-
- ・初めての大学授業に向けて、今のうちにやれることを教えてもらいたい。他の院生、教員との交流、情報交換。(教育学・博・男性)
-

・具体的事例を交えた講義・討論(教育学・修・男性)

・教えるということに関して、少しでも具体的なイメージを持てるようにになりたい。(文学・博・男性)

・高等教育の現場において、必要なこと・求められていることなどの知識と得たいと思います。(教育学・博・女性)

・教える上での実践的な技術や、学生への接し方などを学びたいと思っています。(経済学・修・男性)

・教育というサービスを提供する側に立ったときにどんなことに気を付けるべきか、どんな姿勢を示すべきか、を学ぶこと。周囲の学生がどのような意識をもっているか知ること。(工学・博・男性)

・指導要領は当然なく、最新の研究成果をいかに伝えるか、という方法論の開陳を期待します。文系と理系のグループ分けをするということですが、私の研究スタイルは文系寄りなので、グループ分けにより、受講内容にどのような差が出るのか分かりません。よろしくお願いいたします。(工学・修・男性)

全体的な傾向としては、(1) 現在の大学教育がどのような状況下にあるのか、どのように進められるべきなのかといった「大学教育に関する情報・知識」の獲得、(2) 大学での授業を具体的にどのように進めていくことが望ましいのかといった「授業方法に関する知識」の獲得、(3) 同じ大学院生同士が、ディスカッションを通じて意見交換し問題意識を共有するといった「関係づくり」、などがあげられていた。

特に、本講座の受講動機(2)にもあげられていたが、具体的な授業方法に関するノウハウ的なものを求めている院生が少なからずいることが示された。

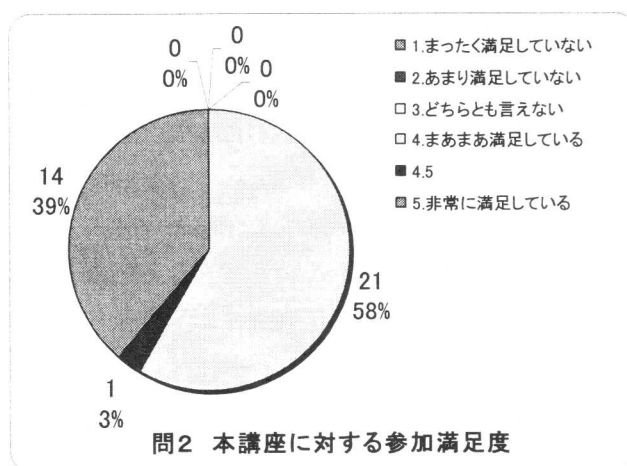
4. 事後アンケートの結果

本講座は第1回ということもあり、今後の改善につなげるために、事前アンケートに加え、事後アンケートも行った。特に、参加満足度や各プログラムに対する有意義度および改善すべき点について、評定と自由記述をもとに構成されている。ただし、講座自体が長期に渡っていることもあり、アンケートは簡便なものにしている。

4-1-1. 本講座の全体的な満足度

ここでは、本講座の全体的な満足度について、「本研修への参加満足度は全般的にどのようなものですか。」という質問に対し、「5.非常に満足している」から「1.まったく満足していない」までの5段階で評定を行った。

結果、満足していないと答えたものは1



名もおらず、全員が程度の差こそあれ、本講座に対し満足感を抱いていることが示された。なお、平均得点も 4.40 と非常に高く、タイトなスケジュールであったにも関わらず、参加した院生からは高い評価が得られた。

4-1-2. 本講座の満足度を規定する要因

評定値から見た本講座の満足度は非常に高いものであったが、以下では、それを規定する要因（理由）について、自由記述をもとにみしてみる（表 5）。

表 5 参加満足度の理由に関する自由記述（参加者 36 名中 33 名が回答）

・ミニ講義では大学教育の直面している問題点を再確認することが出来た。ボディー・ワークでは、非常に新鮮な体験をすることが出来た。全体討論では若干消化不良の感があるが、同じ立場の人々との意見交換刺激的であった。ただ、全体的に時間が不足しており、内容的に「もの足りない」「もう少し」といった感が残る。（工学・博・男性）
・周囲の博士課程の学生が教育についてどのような経験・工夫をしてきたか、考え方について聞いたのが良かった。自己と他者の関わりについての講演（ボディー・ワーク）も有意義だったと思う。（工学・博・男性）
・全体的に多彩な形式で多くの人の経験を聞ける機会がありましたので、良い勉強になりました。（工学・博・女性）
・討論をすることには慣れていないため、全く発言できませんでしたが、他人の意見を聞くだけでも、大変有意義だったと思います。また、現在の大学の状況や、大学の先生の現状を知ることができ、どういう講義形式が良いのかなども分かったので、非常に有益だったと思います。（工学・博・女性）
・とにかく面白かった。時間を意識しないままパーティーになだれこんだ。いつもなら獄中じゃないかと拒絶してしまうところだ。しっかり、主催の意図にはまりました。ボディー・ワークも含め1泊2日なみのプログラムで、そうやってほしかったと思ったけど、考え直せば、この日程で良かった。長いことより、濃いことが大切だから。（工学・修・男性）
・始めなんのためのボディー・ワークかと思ったが、しだいに心身がリラックスし、他者に信頼してもらう方法、自分を受け入れてもらう身のこなしが体で感じる事ができた。つまり、今までの体験したことのない意外なプログラムに感心した。（工学・修・男性）
・グループ（討論）を途中で変わりました（理→文）。申し込みの段階で、将来的に担当するかもしれない科目、専門分野等のリサーチを参加希望者に対してしていただけたら良かったです。（理学・博・女性）
・教育について誰かの話を聞いたり討論したりするのは初めての経験で、自分の今までの体験と照らし合わせて考えさせられたり、納得したりすることが多かった。ボディー・ワークの身体感覚なども、今まで自分がつらいと感じた理由や研究室になかなか来られない人の気持ちも分かるような気がした。最後の田中先生の意識的に受容的であることは、とても大切だと思ったので実践していきたい。（理学・博・女性）
・ミニ講義……初めてこのような内容の専門的な話が聞けて有意義だった。
・討論……他の同様な立場の学生と初めて討論ができ、意見を聞くことができた。
・ボディー・ワーク……初めての貴重な経験ができた。考えさせられるものがあつた。（理学・博・男性）
・このような場は今までなかったので、色々な人の話が聞けて、また、自分の意見に対する反応も聞けてよかったです。一方で、時間の少なさから、消化不良ギミな所があります。あとは、テクニカルな所じゃなくて、根本的なポリシーをどう持つとかいうギロンもしたかったです。あと、ボディー・ワークはよかった。（理学・博・男性）
・日頃の問題をある程度解決しました。勉強になりました。（医学・博・男性）

- ・文系の方々が非常に真剣に教育について考えられており、その活発な討論の結果を全体討論で聞くことができた。また、センターの教員の方々の議論も為になった。(薬学・博・男性)
- ・他大学からの参加でしたが、京大の方がどのように考え、意見を持たれているのかよく分かりました。また、私が伝えたいことも伝えられ、議論できてこれから生かしていきたいと思います。(自然科学・博・男性)
- ・いろいろな専門分野からの博士学生と交流ができてよかった。(情報学・博・女性)
- ・自分自身、大学での講義方法について新たなヒントをつかめたようでうれしく思っています。また、研究センターの京都大学で、高等教育に強い関心を持っている人がたくさんいることを知れたのも良かったです。(教育学・PD・男性)
- ・同じような関心を持っている方々と交流できた。ミニ講義も具体的な話で興味が持てた。ただし、もっと教えた経験のある人が多いと思って参加したので、情報収集という点では少し不満な結果でした。(教育学・博・女性)
- ・他の院生の方々の、いろいろな意見が聞けて良かった。実際に非常勤やTAをされている方の話や先生方のお話で、実際に存在する問題点を知ることができて良かった。普段あまり聞くことのない理系の方々の話も聞けて良かった。(教育学・博・女性)
- ・討論によって参加者のレベルが多少上がったと思うから(+)。逆に言えば、参加者の(個々の)レベルアップにとどまるものだったから(-)。(教育学・博・男性)
- ・参加者の意識がかなり高く、1日という短時間の中で各人の問題意識がはっきりと表現され、その論点について深いとは言えないまでもかなりの議論ができたため。欲を言えばテーマをもっと絞って(ex.ゼミ形式での授業)議論するところまで到達できればよかったが、時間の関係上仕方ないだろう。(教育学・修・男性)
- ・他の研究科の方々の話を聞き、ディスカッションをする機会を持てたのがよかった。また、テンポよく様々な経験をする事ができた。もう少し全体討論の時間があれば良かったかも知れない。(教育学・修・男性)
- ・たくさん論点が出て、色々な人の話すのがきけて、多く考えることができました。面白かったです。はじめに思っていた以上に多くの発見があり、有意義でした。5.ではないのは自らのせいなのですみません。(教育学・修・女性)
- ・①先生方の講義や参加者たちの数多くのご意見を聞かせていただきまして、いろいろな認識が形成しました。
- ・②グループ討論や全体討論の時間が短い気がしました。(教育学・修・女性)
- ・そもそもこのような機会がないので、とても貴重な研修であると思う。ただ、実際に教えている方々の経験談について期待していた以上に聞けなかったのは残念。学生に積極的に参加させる意図があるのであれば、当日の全体討論の司会に学生を巻き込むのはいいが、事前の研修準備打ち合わせの段階で巻き込んでおいた方が、より実りあるディスカッションに持っていけたのではないと思う。(教育学・修・女性)
- ・どのセッションも興味深い話を聞くことができたから。大学教育にたずさわるとき、どういった点に注意を払うべきかがよく分かったから。(文学・博・男性)
- ・非常に内容が濃く、また、他学部の方々と交流ができ、よい経験ができた。(文学・博・女性)
- ・限られた時間の中で、充実した内容だった。2日間くらいあってもよかった。自分の哲学とは何か、具体的な話が聞きたいと思った。(文学・博・女性)
- ・全体のセッションのバランス、テンポが良かった。
- ・大学間教育の問題点・難しさなどがポイント毎によくまとまっていてわかりやすかった。
- ・討論／プレゼンを通して、前述の問題についての様々な人の考えが知れて有意義であった。(文学・博・男性)
- ・ポディー・ワークや講義はとても楽しかった。ただ、午後のグループ討論が、議論というよりも、言いたいことがある人がなんとなく言いたいことを言うだけ、みたいになってしまって、興味がそがれてしまった。午前中の問題提起の段

落は具体性もあっておもしろかっただけに、残念だった。そういう理由でハイにはなれなかったけれど、つかれはしました。(文学・博・男性)

・日本の教育現場における状況を、今回のセミナーを通じてわかりました。そして、ミニ講義の先生達は教育に非常に情熱的な方達だったので、教育効果が高かったです。具体的な教授方法についても大変勉強になりました。(経済学・博・女性)

・「教えること」について真剣に考える初めての機会を得ることができました。教える人、教わる人、またその方法論には多様性があり、その各々に関して様々な意見・立場があることを知ることができました。(経済学・博・男性)

・大変充実した内容で満足しておりますが、議論すべき論点が多く、全てを議論する時間をもつことができなかったため、多少心残りに感じています。(経済学・博・女性)

・ボディー・ワークの意味がよく分からなかった。プログラムが整備されていて、よかった。勉強になりました！(経済学・修・男性)

・様々な人の様々な意見が聞けたので。(法学・修・男性)

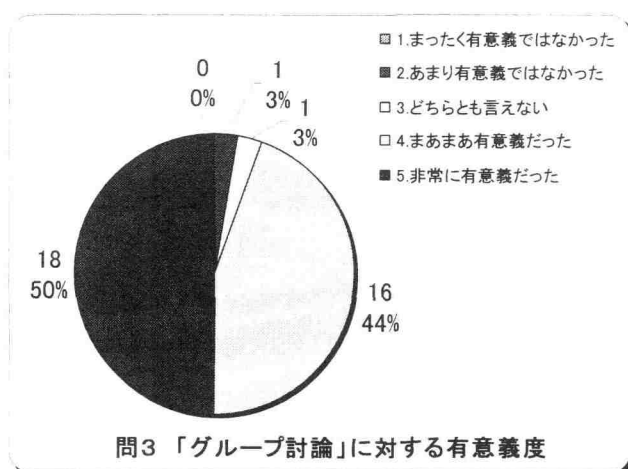
全体的な傾向として、(1) 同じ系統の院生、異なる系統の院生、そして教員からの様々な意見・考え方を聞くことが出来たということ、(2) 大学教育の現状について知ることが出来たということ、などがあげられていた。

これらのことは、事前アンケートの受講動機や期待することで書かれていたことに対応していることから、高い満足度に現れているものと思われる。ただし、授業方法という点では、おそらく本講座の主旨と参加者側の期待とは若干異なっていたことが想定されるが、その点はさほどの否定的な評価の対象にはなっていなかった。むしろ、それを補うべく、上記(1)に対する満足度が高かったように思われる。

4-2. 各プログラムに対する有意義度

ここでは、本講座で施行されたプログラムに対する有意義度について、「プログラムについてのどの程度有意義であったか、お答え下さい。」という質問のもと、「5.非常に有意義だった」から「1.まったく有意義ではなかった」までの5段階で評定を行った。なお、評定は(1) グループ討論、(2) ミニ講義、(3) ボディー・ワークの3つのプログラムについて行った。

まず、1つめの「グループ討論」に対しては、平均得点 4.42 と高い値を示した。このプログラムでは、ある程度の議論の広がりが見込まれる大きなテーマのもと、2度に分けて、参加者の院生同士で自由に討議するというものであったが、グループリーダーやファシリテーターがうまく機能したことも一因として考えられるであろう。



次に、「ミニ講義」であるが、これは平均得点 4.58 と、3つのプログラム中、最も高い値を示した。このプログラムでは、「大学の授業」と題された講義2つと「大学で教えるために」と題された講義1つの計3つがセンターの教員によって実施されている。時間は30分程度で、大学の現状やシステム、これから大学教員として必要となることなどが簡潔に提示された。院生にとって、日頃自分たちのいる大学、ひいては様々な大学の実情など、おそらく関心はありながらもなかなか耳にすることのないような情報を得られたことが、高い有意義度に現れているものと思われる。

最後に、「ボディー・ワーク」であるが、これは平均得点 3.94 と最も低い値を示した。およそ2時間を要したこのプログラムは、身体を使って“相手を信頼することの大切さ”など、教員としての資質の基底ともなる要素について学ぶことが企図されていた。本講座とボディー・ワークとの関連性や位置づけが明確に参加者側に伝わらなかったことが、結果的に得点の低さにつながったものとも思われる。

4-3. 今後の改善に向けて

ここでは、今後の改善への資料として、「今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。」という質問を設け、自由記述による回答を求めた。その結果は、表6の通りである。

全体的な傾向として、(1) 合宿形式にして欲しい、プログラムをもう少しゆったりと組んで欲しい、移動・休憩時間が欲しいなど、色々な意味で「時間配分」に関する点、(2) 技術的・スキルのなことについて教えて欲しいなど、「授業方法」に関する点、(3) 文系と理系を混ぜてグループを作って欲しい、全体討議で議論がかみ合わないなど、「グループ構成」に関する点、(4) 議論の際のテーマをもう少し具体的にしたいなど、「テーマ設定」に関する点、などがあげられていた。

本講座は第1回ということで、上記であげられた改善点に関する指摘は、どれも検討するに値するものばかりである。

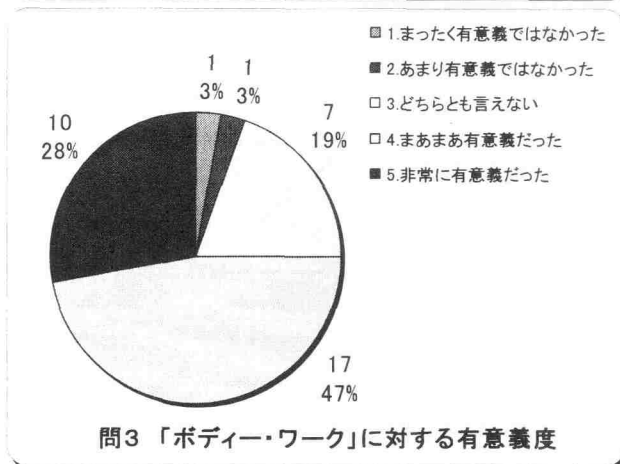
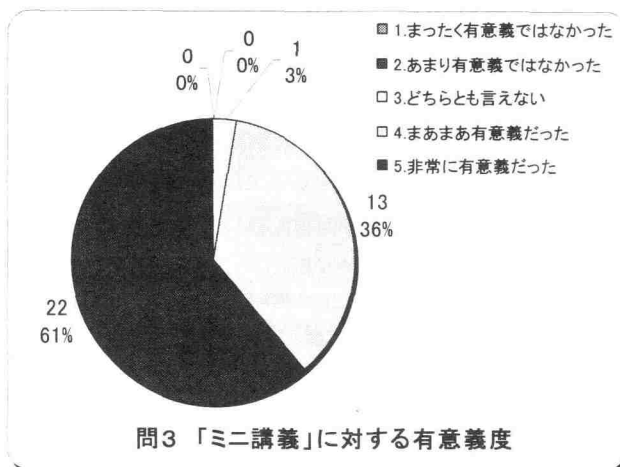


表 6 今後の改善点に関する自由記述 (参加者 36 名中 28 名が回答)

- ・全体討論ではグループ毎に、観点が異なり、議論がかみ合っていなかった。時間配分、グループ分け、実施方向等改善が望まれる。
- ・教育者は人間的にプロでなくてはならないと思う。心理的など、コーチングのスキルなどについても講演、学習の進め方についての指導があるとよりよいと思う。国立大学でも法人化している。大学はサービス業であり、教育サービスの質の向上が必須であること、ビジネスの感覚を持つことをより強調するのいいと考えている。
- ・一週間ぐらいしてほしいです。
- ・少し間に休憩を入れてほしかったです。
- ・派手に宣伝した方が受講者が多くなると思います。秘伝にしておくのなら、このままでいいでしょう。グループ討論は文理混合でいいのではないのでしょうか。
- ・フォロー研修、又は第2部があれば是非参加したいです。その際は連絡よろしくお願いします。
- ・短い時間の中で様々な企画が組まれていたため、討論が消化不良になったように感じた。講義を減らして、討論の時間を増やした方がいいのかもしれない。また、討論では、議題がうまくまとまらないことが多々あったが、個々人に取ってはいい問題提起となった。そのため、このような教育実践講座を年に何度か開いてほしい。
- ・ボディー・ワークだけでなく、発声・滑舌・話し方のワークショップがあると良いと思います。聞き取りやすい声・話は、大事なスキルですが、日常ではなかなかコツをつかむ機会がないものですから。
- ・全体討論の時間がもっと欲しかった。もっと、2日にわたってやるなどしても良いと思った。ボディー・ワーク、全体討論の部屋の冷房がきつすぎて集中できず、議論にうまく参加できなくて残念だった。
- ・特にありません……。討論時間、講義時間もちょうどいい。修了証を預けるのはすばらしい。
- ・文系、理系という分け方は、表面的で実学指向の所と、学問指向の所では、温度差がある。教育とか文とかの人とも議論したかった。あと、時間のなさから論点がしぼりきれない。もっと朝早くはじめたらどうか？ 全体討論は入りにくかった。何を問題にしたいのか、把握が大変。これは時間不足。2時間はいる。午前のセッションのようなグループ同士の「自己紹介」の時間がいると思う。
- ・疲労させることで、議論の障壁を取り除くことで活発な討論を促したと田中先生がおっしゃっていたが、間に少し休憩をとったほうが良いと思います。
- ・—Except for homonous group's discussion、 groups of diversities can also discuss together of some issues、 that might be interesting、 too!
- ・—If the schedule could be more earlier (during the semester) it would be better.
- ・田中先生の最後のお話で、このプログラムの目的のうちの1つに「そう状態を維持する」ため、タイトなスケジュールになっていたことがわかりました。ただ、やはりタイトな影響で、セッション7の全体討論の準備のために、溝上先生のお話の一部に集中できなかったのが、とても残念でした。セッション7の前に休みが10分ほどあるとさらに良かったと思います。ありがとうございました！
- ・ボディー・ワークの意義がいまひとつはっきりとしなかった。言葉だけでなく体を動かすのもいいとは思いますが、位置付けがもう少しあるといいなと思った。文理で分けてのディスカッションだったけれども、一緒にできたら良かったかなとも思った。
- ・大学授業での失敗経験をもっとたくさん聞ける機会がほしい。

-
- ・全体討論の時のポジション(円をつくった方が議論しやすかった)。 ボディー・ワーク(言わんとしていることは分かるが、言葉で言えばわかるし、体を使う意味があまりなかったように思う)。 結局、個人の資質向上による改善を目的としたものだったのか？それとも知識をデータベース化して共有していくことを目的として人を集めたのか？「マニュアル」とは共有すべき外部知識(データベース)のことであり、それを目指すべきだと思う。(∴問題意識のある人は集まる。集まらない人達をどうするかを考えないといけない) 1人1人授与とか不要と思った。
 - ・ボディー・ワークをする場合、目の覚める活動をやってほしい。今回は、特に教育学の人間の場合、知り合いが多くて議論の進行が早かったが、そうでない場合もあるだろうから、アイスブレイクのセッションもあった方がいいかもしれない。
 - ・少々過密スケジュールだったように思った。「疲れさせる」のも1つの目的だったということなのですが…。でも、興味深く受けさせていただきました。ありがとうございました。
 - ・今おちついて考えつくこのプログラムの改善点はありませぬ…。私は早口な田中先生の話し方が好きだと思ったし、年輩の先生の授業の‘味’も好きだしみんな色々だなあと感じます。 今日はありがとうございました。
 - ・①グループ討論や全体討論の時間をすこし充実すればと考えています。
 - ・②大学で教えることに関する技術、技法や気をつける点についてもっと具体的に提言して欲しいと思います。
 - ・ボディー・ワークはRelaxしすぎました。1泊2日の合宿形式であれば、就寝前にすることでかなりRelaxできたと思いますが…。全体を通して、また参加したいと思う内容ではありましたが、次会はより「疲れる」プログラムにしたいと思います。
 - ・どれもよく練られたプログラムで、たいへん充実しておりました。ありがとうございました。
 - ・可能であれば、連続研修会なども企画していただければと思います。また、京大出身で非常勤講師などの経験をされている方の経験談などを聞く機会があればと思います。
 - ・プログラム参加前に全体像が掴みづらかった。
 - ・非常勤の若い新米先生などによる、苦労点・難しい点などの生の声が、最初に提示されていれば良かった。議論の方向づけのためにも。
 - ・グループ討論の際に、もう少し具体的なテーマを提示していただけると、初速とベクトルが改善されたかもしれません。ただし、この意見も受け身的であることは自覚しているのですが。
 - ・移動時間をとっていただけていたら、少し余裕を持って行動することができたと思いました。
 - ・教える技術も学びたかった。
 - ・討論への導入：自己紹介後、討論の雰囲気になるまで時間がかかった。 全体討論の場の形成：車座になるにしても、もう少し議論しやすい配置に誘導した方が良さそう。
 - ・ボディー・ワークの位置付けが中途半端だったように思う。
-

5. 最後に

“本講座は、京都大学の大学院生が将来大学で教えるために、大学院生時代に自覚的に自分自身を形成していくきっかけとなることをめざす(本講座プログラムより)”という方向性のもと実施された。本講座は1日という限られた時間の中で、複数の「グループ討論」「ミニ講義」、

そして「ボディー・ワーク」「全体討論」といった計 8 つのセッションから構成された。講座の最後には、“総長名の修了証”を授与し、教育業績の一環となるべく履歴書等にも書けるよう配慮された。様々な課題・問題点はあるながらも、参加した大学院生からは高い満足度・有意義度を得ることが出来た。終了後のパーティで、参加院生からメーリングリストを立ち上げる動きが自発的に出てきたことも、それを裏付ける 1 つの指標となっている。また、本講座の後日、参加した院生数名とセンター教員とで“意見交換会”を設け、積極的な議論が行われた。

今後は、考えられる課題・問題点について吟味・検討し、より京都大学の教育に貢献しうる活動としていきたい。

資 料

大学院生指導教員各位

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」実施へのご協力の依頼

教育担当理事 東山紘久

標記講座を、下記の要領で実施いたします。この実践講座は、京都大学の大学院生が将来大学で教えるために、大学院生時代に自覚的に自分自身を形成していくきっかけとなることを、めざしています。講座修了者には、総長名の修了証を授与いたします。

本講座は、高等教育研究開発推進センターが運営し、学生部教務課が事務を担当します。

この講座の実施には、たんに大学院生個人にとってばかりではなく、京都大学にとっても大きな意味があります。京都大学の大学院生は、将来、全国で大学教員となる見込みも高く、したがって、このような研修を実施することは、京都大学がその社会的責任に応えることでもあります。さらに、この研修を実施することは、TA の担い手でもある大学院生といういわば「ボトム」から京都大学の教育を改善することにもつながります。

なにとぞこの趣旨にご賛同いただき、先生にご指導いただいている大学院生の参加を強くおすすめいたしますよう、お願いいたします。

記

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」実施要領

実施日	平成17年8月4日
場 所	京都大学時計台記念館
参加料	2000円（ランチ代および終了パーティ代を含む） 8月4日の受付時にお払いください
申し込み締め切り	平成17年6月30日
参加申込の仕方	氏名、所属（研究科、講座など）、指導教員名、連絡先（住所、電話番号）を書き添えて、下記のメールまたはファックスに申し込んでください

なお、当日は、軽い活動ができるように、ラフな服装で、参加してください。

「大学院生のための教育実践講座—大学でどう教えるか—」
参 加 申 込 書

氏 名				
所 属	(研究科名)		(専攻名)	
	(修士・博士区分)	修士 ・ 博士	(講座名)	
指導教員名				
連 絡 先	郵便番号 (住所)			
	(電話)			

メールアドレス kyomu56@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

FAX番号 075-753-2485

申込締切 平成17年6月30日(木) 期限厳守

※参加申込書は、「京都大学ホームページ」に掲載しております。

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」
事前アンケート

高等教育研究開発推進センター第1部門

このアンケートは、本講座の実施と改善に役立てるために実施するものです。記名式になっていますが、上記の目的以外に使用することは決してありませんので、よろしくご回答のほどお願い申し上げます。

お名前：_____

ご所属：_____

問1 この講座のことをどのようにして知りましたか？（あてはまるものの番号をすべて○で囲んで下さい）

- ① 指導教員から ② その他の教員から ③ 友人から ④ 大学のHPで
⑤ センターのHPで ⑥ 掲示板で ⑦ その他（ ）

問2 どうして、この講座を受講しようと思いましたか？

問3 この講座にどんなことを期待していますか？

ご協力ありがとうございました。

大学の授業 1

1

3

3

2

2.1 高等教育の段階移行

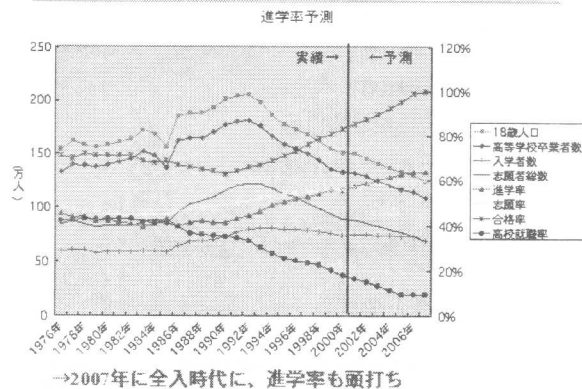
(マーチン・トロウによる)

5

2.2 大学進学率の変化



大学進学率の予測結果



2.3 二つの“問題”

■ エリート段階→マス段階

- 第一次ベビーブーム世代
- 大学紛争(1960年代末)

■ マス段階→ユニバーサル段階

- “2007年問題”
=大学全入
- “2006年問題”
=「ゆとり教育」「学力低下」世代の入学
- 「大学の学校化」「高等普通教育化」

8

2.4 大学内・大学間の格差拡大

■ 大学内

- 学生の多様化
…学力格差、学習意欲格差の拡大

■ 大学間

□ 大学の種別化

- 研究大学
- 教育中心大学
- “Fランク”



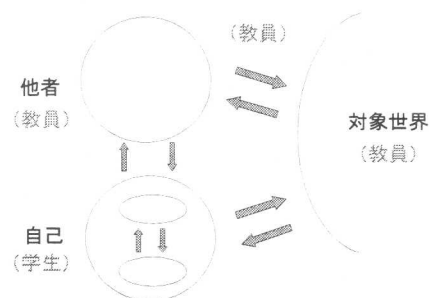
—あなたの就職する大学はどんな大学だろうか？

9

3. 授業者として求められること

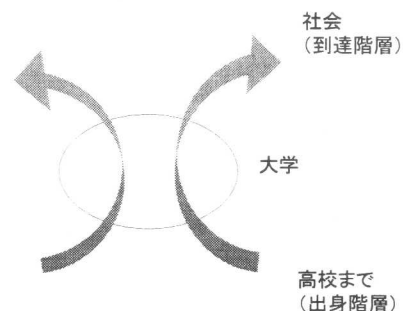
10

3.1 三つの関係に着目する



11

3.2 学生の〈学びの履歴〉を考える



12

3.3 学生の“声”を聴く

- <学生としての自分>とは異質な学生に教える
- 学生とのディスコミュニケーション？
 - 統制？
 - 閉じこもり？
- ↓
- 学生の“声”を聴く → 対話
 - e.g. 「何でも帳」
 - 教員と学生のインタラクション
 - 学生同士のインタラクション
 - ポートフォリオ

13

3.4 自分の哲学とスタイルをもつ

- 学生の声を聴く
 - ≠ 学生の要求に応じる
 - …学生の多様な要求に応じることはできないし、
応じるべきでもない
 - …むしろ、自分の哲学とスタイルをもたないために
学生の要求に対峙できないことが問題
- 学生と教員とのズレ
 - 教育・学習について対話する絶好の機会
 - e.g. ポケゼミ(有機化学)…学期の中間に

14

4. あらためて二つのケースについて

15

4.1 修得主義と単位制度

- 履修主義と修得主義
 - 履修主義…履修すれば課程を修了したものとみなす考え方
 - * 小・中(・高)
 - 修得主義…課程の内容を修得したことで課程を修了したものとみなす考え方
 - * 高・大

16

■ 単位制度

- 1単位＝「45時間の学修を必要とする内容をもって構成する」



■ 実際

- 講義: 半期で2単位→制度通りなら90時間(60コマ?!)

17

■ カラクリ

- ① 45時間＝授業＋授業外
(配分は大学ごとに決められる)
 - e.g. 講義: 15時間＋30時間 → 30時間
 - e.g. 実験・実習・実技: 30時間＋15時間
(実験が1コマ1単位になっているわけ)
- ② 1コマ(90分)を2時間とみなす → 15コマ
- ③ 15コマきっちりやっていることにする



- * 出席≠修得
- * 出席をどのくらい成績評価に入れるかは教員の裁量

18

4.2 学生消費者主義

cf. D.リースマン(1980/1986):「学生消費者主義」

■ 消費者メタファー

- 学生は、教育サービスを選択し、購入する消費者（あるいは顧客）
- 大学は、そのニーズを把握し、顧客満足度を高めるような教育を提供しなければならない
- 授業という商品の説明書および契約書としてシラバスが機能する
- 顧客満足度を測るために、学生による授業評価を実施する

21

■ 日本の学生

- 子どもの頃から、Wスクールの中で養われたサービスの受け手としての態度
- not 消費者としての権利の主張

■ 消費者メタファーは適切か？

- 学生(買い手)－大学(売り手)
- ↓ 逆転
- 企業(買い手)－学生(売り手)

■ 大学教育の課題

- 学生を能動的な創造者へと変えること
 - 対象世界との関係
 - 他者とのネットワーク
 - 自分自身のアイデンティティや将来への見通し

20

5. さまざまな試み

21

5.1 大学生らしい学び方を学ぶ

■ 初年次教育(導入教育)

- レポート作成、文献検索、ノートテキング、プレゼンテーション、時間管理、…etc.
- * スキル先行 / 一般的な方法論

⇔ ポケゼミ

- * 内容も / 特定の学問分野の方法論

22

5.2 学習に見通しをもつ

■ アーリー・エクスポージャー(early exposure)

- 主に医学教育
- 入学初期に臨床の場で体験実習

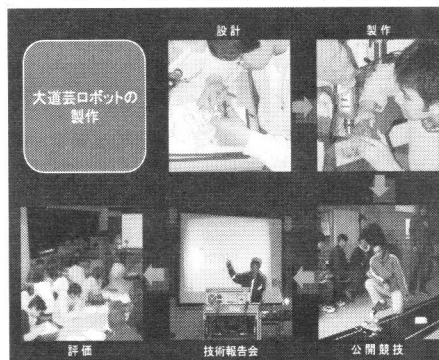
■ 創成科目

- 工学教育
- く専門的な知識の準備なしに、具体的な目標のはっきりした、しかし解が多様に存在するような問題に学生を直面させることを通じて学ばせる
- e.g. 卵落とし

23

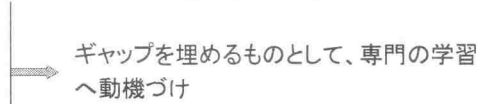
◆ 創成科目の例 (徳島大学工学部)

出典: 英 崇夫「進取の気風を育む創造性教育の推進」
(大学コンソーシアム京都第9回FDフォーラム、2004.2.24)



■ 両者に共通した考え方

- 自分の学んでいる学问が不可欠のものとして使われている現場にふれさせ、将来つくであろうと思われる仕事の大まかな像を描かせる



- 現在の自分の未熟さや専門的力量的不足を意識させる

25

5.3 講義はダメなのか？

- 知識を体系的に習得するための効率的な方法
(一見、学生には最もラクそうに見えるが…)
- 授業に巻き込む力は弱い
- 聞きながら理解・思考するのは困難
- 〈意味あるものになるには、高い能力と動機づけが要求される〉という認識が必要

26

大学教員のための教育実践講座 ―大学でどう教えるか― 2005.4.4

大学の授業 2

溝上 慎一
京都大学高等教育研究開発推進センター
<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/mizo.htm>
E-mail smizok@hedu.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

【1】

中堅以下の大学での現実

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

学生を卒業させるために

- テスト問題のつくり方に象徴される現実の厳しさ
 - ― 「持ち込み可」「レポート試験難しい」

by 神戸学院大学法学部FDワークショップ
by 非常勤先の大学で

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

【2】

これまでの大学授業改善・開発の動向

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

大学の授業改善・開発の分類

タイプ	タイプ1	タイプ2	タイプ3
改善・開発の別	改善型	開発型	開発型
授業の形態	講義型	講義型	学生主導型
学習者の授業への参加形態	受動的学習者	能動的学習者	能動的学習者
学生との双方向性	無	有	有
実践例	・話し方(声の大きさやスピード) ・板書の仕方 ・コンピュータやネットワーク、パワーポイントなどのメディア利用 ・実物やモデルによる提示 など	・小レポートを定期的に課す ・紙メディアを用いたハイパーカードの作成 ・大福帳・何でも帳 ・質問書・授業通信 ・授業リフレクションシート	・学生参画型授業 ・KKJ実践 ・ブシュケ・ネット ・相互集団教育力 ・CSCL環境

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

フォーカス

- 世の中の一般的な焦点化は、極端なタイプ1と極端なタイプ3
- 本報告での焦点化はタイプ2
 - ・タイプ3...調べ学習中心。
学生は必要な知識や情報を、図書館で本や文献を調べたり、インターネットなどで検索したりする。
成果を発表したり、ディスカッションをする
 - ・学問領域によっては、少し調べたくらいで収集できる知識や情報というのはたかだかしかない。
 - (例) 積み上げ式の授業。理科系の基礎科目。文系でも数式、記号の頻出する内容、外国語(ドイツ語やギリシャ語、チベット語など)や古典、歴史、思想の知識を必要とする内容

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

フォーカス

積み上げの知識というのは、すぐには役立たないが、体系的に時間をかけて学んで、ようやく役立つ類のもの。

それが大学という場ではないのか！



講義形の授業への積極的なフォーカス

＝タイプ2(学生との双方向を前提とする講義形授業)

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

タイプ2の特徴

・授業者の教えたい、教えなければならない知識の枠組みが強固である。

・それにもかかわらず、学生に能動的学習者であることを求める。



・授業者はかなりの程度、学生に働きかけねばならない

・対峙してくる学生の姿につきあわなければならない

「双方向性」「相互行為」「コミュニケーション」

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

【3】

タイプ2の授業を実現するために

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

授業ツール

● 学生の感想や意見、質問を受け取るメディア使用

・大福帳(織田、1991、1995)

・何でも帳(田中、1996)

・リフレクションシート...授業の振り返り(藤岡、2002)

・質問書方式(田中、1991)

・小レポート

・メール、ML、インターネット掲示板 など

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

ポジショニングの作業

●何でも帳を用いた授業『ライフサイクルと教育』Since 1996年)

(京大センター「公開実験授業」)

ポジショニングの作業

● 何が起きているのか？

学生・授業者にとって...疑問を発して、教師はそれに答えただけ(反論、コメントという形で)。



「知識を伝達するだけの授業」から「学生自身の知識世界に立ってEriksonの相互性を理解させる授業」へと転換



学生にとってこれは「能動的な知識構成の作業」

⇒ポジショニングを促す授業

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

相互行為で現れる「他者性」に対峙する

- 「双方向性」は授業ツールで形式上実現する

⇒ しかし、学生との「相互行為」は、たとえ学生が積極的に授業にのぞんでいても、授業者に次のような当惑を与えることが多い



学生の期待とズレる

【学生1】睡魔がおそってきた。理由①目新しくない話をえんえんと話されたから。②寝不足。はっきりいうと、けっこう期待していたのに、今日は不発に終わる。

【学生2】さまざまな教育に関する問題があつて、どれも簡単には片つかないことはわかったけれど、具体的な対応策について少しは触れてくれないとどうもすっきりしない。

Finish

Presented by Dr. Shinichi Mizokami

「大学院生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」実施後アンケート

京都大学高等教育研究開発推進センター 第1部門

アンケート結果は来年度の改善資料として用いますので、ご協力を宜しくお願い致します。なお、結果がそれ以外の目的で用いられることはありませんし、個人情報が特定されることもありませんので、安心してお答え下さい。

以下、番号にはもっともあてはまるものに1つ○をつけ、カッコ内は自由に記述してください

1.

性別（1. 男性 2. 女性）

所属 _____ 研究科 （1. 修士 2. 博士）課程

学年：1. 1年 2. 2年 3. 3年 4. PD など 5. その他（ ）

2. 本研修への参加満足度は全般的にどのようなものですか。

5. 非常に満足している 4. まあまあ満足している 3. どちらとも言えない
2. あまり満足していない 1. まったく満足していない

→ その理由をお書き下さい。

裏に続く

3. プログラムについてどの程度有意義であったか、お答え下さい。

5. 非常に有意義だった	4. まあまあ有意義だった	3. どちらとも言えない
2. あまり有意義ではなかった	1. まったく有意義ではなかった	

(1) グループ討論	5	4	3	2	1
(2) ミニ講義	5	4	3	2	1
(3) ボディー・ワーク	5	4	3	2	1

4. 今後に向けて改善した方がいいと思われる点がありましたら、自由にお書き下さい。

ご協力まことに有難うございました。